

『なぜ大国は衰退するのか 古代ローマから現代まで』（日本経済新聞出版社、2014/10）

著者：グレン・ハバード、ティム・ケイン

【詳細目次】

第1章 序論

/米国の存亡に関わる脅威とは財政問題である/エンタイトルメント国家/民主制のパラドックス/本書の概観/

第2章 大国の経済学

/国富とは何か/顕微鏡と望遠鏡/恐怖を生かし続けよ/混乱と合意（成長に必要な導火線）/ポール・ケネディの相対主義/「しかし中国は違う」/経済成長率に関する問題/経済力をどう測定するか/経済力で世界を見る/衰退主義の行動経済学的説明/

第3章 経済的行動と制度

/人々は実際にはどう行動するのか/国家のビジョンと分裂/掌中の鳥/長身者の問題/経済的・政治的制度/大国が不均衡に陥る標準的パターン/

第4章 ローマ帝国の没落

/ローマ帝国の経済の概説/カエサルのまいた種/衰亡の証拠/ローマ帝国の不均衡/「終わり」の始まり…トラヤヌス帝の即位/「終わり」の途中…セウエルス朝期の通貨改悪/「終わり」の終わり…ディオクレティアヌス帝の指令経済集合行為の問題/

第5章 中国の宝

/孔子/「変化」だけは変わらなかった/革新と成長/宝船の真実/大いなる分岐/拡大しすぎたのか、内向的になったのか、あるいは他の理由か/

第6章 スペインの落日

/16世紀のスペインの（地理的）成長/超大国まであと一歩だったスペイン/銀に支えられた帝国/財産権の功罪/政治的なクラウディングアウト/

第7章 奴隷による支配 オスマン帝国のパラドックス

/寛容と多様性/イエニチェリ/タックス・ファーマー/あまりに小規模で手遅れだったのか/

第8章 日本の夜明け

/布石…ジョン万次郎と名人/手筋…“アジアの奇跡”のおもな特徴/新たな布石…日本は再起できるか/

第9章 大英帝国の消滅

/英国はどのように発展したのか/無益な予言/英連邦構想の再生/

第10章 ヨーロッパ統一と多様性

/2つの国の国家統制主義/理論モデルとヨーロッパのスーパーモデル/ユーロ圏に対する賛否両論と金利/ユーロ圏の危機は通貨ユーロの危機なのか/制度という手段/「クリスマスの精霊」の訪れを待つ/

第11章 カリフォルニア・ドリーム

/自由の帝国、州の連合/政府に対する束縛（地方債や年金）/緊張の緩和/カリフォルニア州の暗部（税金、財政赤字、鉄道事業）/新たな“近衛隊”の出現/任期制限と時間選好/選挙区改定による分極化/破産のインセンティブ/

第12章 米国に必要な長期的視野

/中心は崩れない/分極化の第一の検討/政府債務の歴史と将来/「エンタイトルメント」の第一歩/政治的な「囚人のジレンマ」の打破/分極化の第二の検討/

第13章 米国を改造する

/大国の歴史の教訓/経済のバランス/経済面での最善の未来/民主制を守る/改革のオデュッセイア/憲法修正第28条/米国の再生/

付録 超党派的な財政均衡憲法修正条項の文案



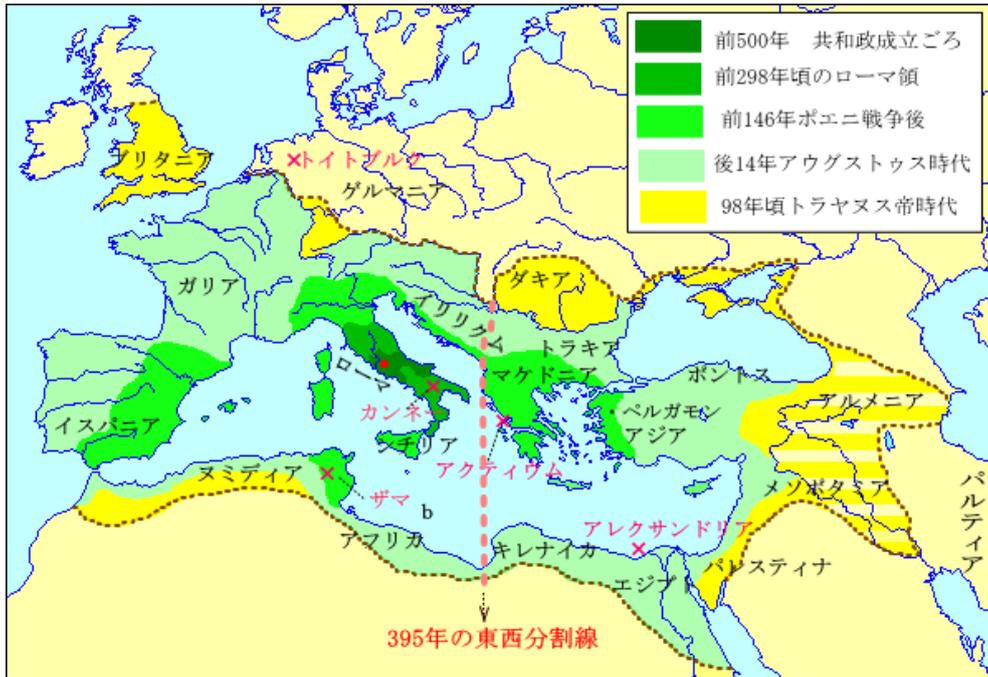
崩壊の原因

第1章 序論

第2章 大国の経済学

第3章 経済的行動と制度

第4章 ローマ帝国の没落



《衰退の概要》

大国：ローマ帝国

転換点：117～317年

経済的不均衡：財政面、金融面、規制面

政治的な原因：福祉国家の拡大、中央集権化した統治、軍事独裁

行動面での機能不全：インフレや自由労働市場が極端化した状況における限定合理性。ローマ軍の集合行為の問題。

《歴史現象と衰退要因》

[概要]

- ・都市国家から始まったローマは、BC1世紀末までに地中海全域を支配し、BC27年に共和政から帝政に移行した。当初は共和政的要素も残り元首政がとられ、2世紀の五賢帝の時代には最も安定し領域も最大になった。しかし、軍人皇帝時代の混乱、ゲルマンやササン朝の侵入などがあって次第に衰え、専制君主政に移行し、395年には東西に分裂した。その間、キリスト教が帝国内に浸透、厳しく弾圧されたが、313年に公認され、さらに国教となった。
- ・ローマ帝国 (BC27～AD1453) の時代区分：王政時代 (BC753～BC509)、共和制時代 (BC508～BC27)、帝政時代 (BC27～AD476)。東ローマ帝国 (395～1453)。神聖ローマ帝国 (962～1806) は、ローマ帝国の継承者を名乗った。
- ・帝政時代の詳細時代区分：I 元首政 (プリンキパトゥス) の時期、①ユリウス＝クラウディウス朝、②フラウィウス朝、③五賢帝、④セウエルス朝。II 3世紀の危機。III 専制君主政 (ドミトナス) の時期、①コンスタンティヌス帝の統治、②キリスト教の国教化、③帝国の東西分裂、④西ローマ帝国の滅亡
- ・同上古代ローマの帝政期 (BC27～AD476) 時代区分：①プリンキパトゥス (元首政) は、BC27～AD235で、厳密には「3世紀の危機」を含むAD284まで続いた。②ドミナートス (専制君主政) と呼ばれる帝政ローマ後期は、AD476まで続いた。後期の特徴は、内戦と外部との戦争の区別がつかないほどで、ローマ帝国の経済的ピークは元首政の初期ではなくて末期だった。

[戦争]

- ・領土拡張戦争：ローマ・エトルリア戦争 (BC750～BC500)、ローマ・ガリア戦争 (BC390～BC193)、ローマ・アエクイ戦争 (BC458～BC484)、ローマ・ウォルスキ戦争 (BC6世紀～BC4世紀)
- ・外敵の侵略：ササン朝ペルシアの侵寇 (244 ごろ)、西ゴート族 (ゲルマン人) によるゴート戦争 (376～382)。東ゴート人の侵入 (406)。ヴァンダル人などのライン渡河 (406)。ブリテン島を放棄 (409)。西ゴート人のアラリックのローマ掠奪 (410)。ヴァンダル人のガイセリック、アフリカに入りピッポでローマ軍を破る (430)。フン人のアッティラ大王のガリア侵入 (451)。アッティラ大王、ローマに侵入。ローマ教皇レオ1世による説得で撤退 (452)。ヴァンダル人のガイセリック、ローマ掠奪 (455)。ガイセリック、アフリカ・シチリアその他の地中海諸島を領有 (474)。西ゴート人のスペイン領有、ブルグンド人などのガリア分割 (475)。西ローマ帝国、オドアケルによって滅ぼされる (476)。

- ・大規模な帝国で軍隊が支配的な立場に立つことの経済的メリットは、軍団を国境以外に配置する必要がなくなることである。
- ・ハドリアヌス帝（117～138）は、パルティア人の軍隊が国境を脅かしたとき、パルティア人に金を与えて兵を引かせた。平和を金で買った！

[経済]

- ・経済の基礎：域内交易の活発化、イタリア国内の経済は農業に依存していたが、嗜好品生産に偏り、主食生産に転換できなかった。
- ・ローマ帝国の経済は、主に地方・農業中心だった。ローマ帝国に納められたアンナノという税は、一般に穀物による物納だった。
- ・とは言え、ローマ文明の特徴は、交易・サービスの専門化を可能にした都市の存在だった。古代ローマ時代のイタリアの40%、ローマの町自体を除外すれば25%都市化されていたと推定される。都市化は、ローマン・コンクリートや、建築学と工学の進歩によって実現した。だが、土地の所有が依然として富の源泉だった。
- ・ローマの各街道や拡大を続けるローマ中心部での交易の利益が増大するにつれて、農業経済が発展した。交易の利益は、軍隊のおかげだった。
- ・奴隷の多用も古代ローマの分化が単純労働を蔑んでいたこと物語っている。古代ローマでは住民の3人に1人が奴隷だった可能性がある。

[政治]

- ・かつて円満な「共和国」だったローマは、突如ユリウス・カエサルの「独裁国」に変化した。カエサル以前の100年間で、非民主的で腐敗した野蛮な社会に転落していった。共和国は名ばかりになり、市民権はイタリア中心地域のエリート層だけに与えられるようになっていた。「スッラ（BC138～BC78）」の独裁制が成立し、国はようやく安定した。
- ・カエサル（BC102～BC44）による皇帝的な支配、とくに征服した異民族にもローマ市民権を与えるというポヒュリズム的な市民権拡大策によってローマは救われ、アウグストゥス（BC27～BC14）の業績によってローマ帝国の力は強固になった。
- ・カエサルの独裁や、その後の帝国成立は、古代ローマ史における衰退への転換点であり、200年ほど時期尚早だった？
- ・ローマというアイデンティティーは確立し広まった。ローマの価値観は普遍的なものと理解された。（米国が基本的人権という概念が、あらゆる国に当てはまると考えているのと似ている。）ローマ人は、他の文化の有益な面を取り入れる一方で、征服した民族を自国の分化に順応させることが容易にできる用になった。
- ・ローマ帝国が大きな成功を収めた要因が、ローマ市民権を他の民族にも拡大したことだった。
- ・パックス・ローマーナの時代の意義：①ローマの前にも後にも、地中海を囲む全域を支配した文明はなかった。②2000年近くにわたり、技術の高度化の面でローマ帝国の水準に近づいた社会も出てこなかった。
- ・ローマ帝国の地理的な規模が最大になったのは、トラヤヌス帝が死去したAD117年のことである。

[衰退]

- ・アウグストゥス（BC27～BC14）治世から100年たつと、ローマ帝国の成長は停止した。そして、アウグストゥスの死から約450年後、帝国の半分の町は衰退した。
- ・ローマ帝国の滅亡は、ある時点の出来事というより、数百年にわたる経済の崩壊だった。[ローマの町が国外の侵略者の略奪を受けた410年？ ゲルマン民族がラインカやドナウ川を越えて暴力的に移住してきた為、ローマの町を囲む城壁の建設を始めた271年？ 西ローマ帝国最後の皇帝が都を追われた476年？]
- ・ローマ社会の複雑性が失われた原因：巨大で摩擦の無かった国内交易市場の規模の崩壊。（ローマ帝国時代の町が点在した地域の地図が、現在では田舎・荒野を示している）
- ・規模の経済の消滅は、消失が衰退の原因ではなくて、結果である。（5世紀の経済破綻のはるか前に、経済的な痛手を自ら招いた時期が300年に渡って続いた）

○最初の過ち：AD122に始まった「ハドリアヌスの長城」建設。（領土拡大、征服から手を引き、内向きになった）

○第二の過ち：2世紀末にセプティミウス・セウェルス帝が行った銀貨の悪貨化。

デナリウス銀貨：①デナリウス帝（銀の割合87%⇒81.5%）、②セウェルス帝（⇒78.5%）、③セウェルス帝（⇒64.5%）、④セウェルス帝（⇒54%）、⑤セウェルス朝末期（⇒40%）、⑥最後（⇒2%）

○第三の過ち：3世紀末にディオクレティア帝が、経済の衰退に対する処方箋として、経済を支配・統制

しようとした。

○ローマ帝国の基本的な制度が徐々に崩れていく一方で、その民が「パンとサーカス」で楽しみを与えられ、買収されていた。首都ローマでは、国民を楽しませることが政治の中心になってしまった。

○兵士に支払う給与の財政負担が大きくなりすぎた

第5章 中国の宝

《衰退の概要》

大国：帝政期の中国

転換点：15世紀

経済的不均衡：対外貿易の大幅な縮小

政治的な原因：中央集権的な統治、独裁的な政策立案、官僚の内部分裂

行動面での機能不全：ゼロサム型思考に陥った官僚による損失回避、商人・利得・外国の知識を敵視するアイデンティティー面でのヒューリスティック、経済成長としての貿易の重要性に関する無知

《歴史現象と衰退要因》

―― 省略 ――

第6章 スペインの落日

《衰退の概要》

大国：スペイン帝国

転換点：1550年

経済的不均衡：財政赤字と国家の破産、不適切な財産権

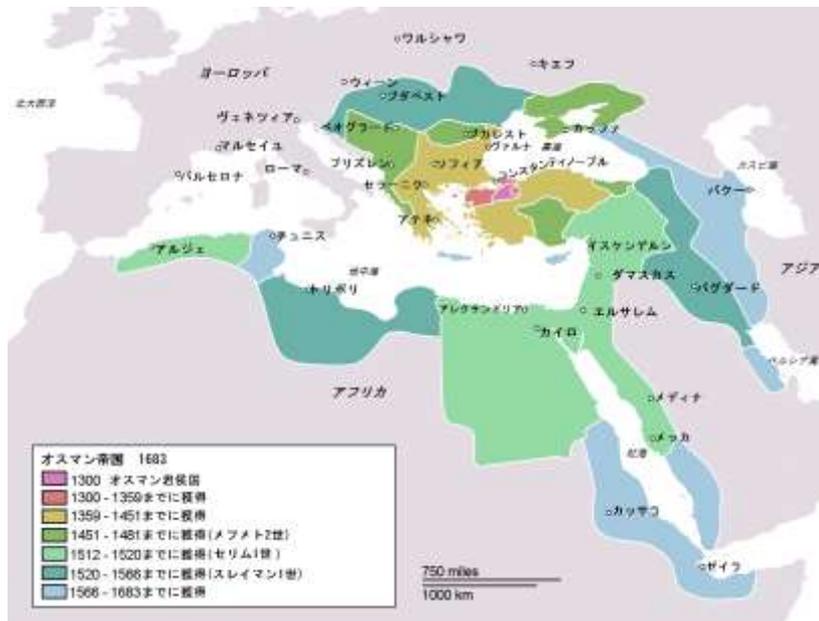
政治的な原因：中央集権的な君主制

行動面での機能不全：ギルドの損失回避行動の固定化、生産性向上の機会の本質に関する限定合理性

《歴史現象と衰退要因》

―― 省略 ――

第7章 奴隷による支配 オスマン帝国のパラドックス



《衰退の概要》

大国：オスマン（・トルコ）帝国

転換点：1550～1600年

経済的不均衡：財政面、技術面

政治的な原因：政府の中央集権化、神権政治、官僚階級のレントシーキング

行動面での機能不全：ゼロサム型思考の官僚による損失回避、外国のアイデアを敵視するアイデンティティー面でのヒューリスティック、経済成長としての技術の重要性に関する限定合理性

《歴史現象と衰退要因》

- ・初期オスマン帝国の多様性は、この国の神髄だった
 - ・中央政府内で支配的になった**文化的優越性**のヒューリスティクスにより、外部からの新アイディアの流入が遮断された
 - ・オスマン帝国の統治階層を説明するには「**連邦独裁制**」がピッタリである
 - ・**アスカリ**はオスマン帝国の支配層であり、免税、武装、騎乗の特権を有しており軍人、書記、法学者なども属していたによる官僚制度がオスマン帝国支配の基礎
 - ・オスマン帝国が新たに征服した土地に導入した制度が「**ティマール（土地）制**」
 - ・ティマール制のもとで、スルタンは居住権を人びとに与え、行政権を「**シュパヒー**」と呼ばれる騎兵に与えた
 - ・スルタンに対する地方の影響力を相殺した政治軍事的制度が「**イエニチェリ軍団**」である
 - ・バルカン半島のキリスト教徒少年が選抜され**奴隷軍人**になった。イスラム教に改宗させられ、**アスケリ**階級の一員になった
 - ・常備歩兵軍のイエニチェリと、非常備の騎兵軍シパーヒーの組み合わせは、数百年オスマン帝国の君主を支え続け、各種勢力とのバランスの維持が出来た。
 - ・この均衡に**17世紀に経済的圧力**が作用した。イエニチェリがレントシーキングの主体に変わっていった。スルタン選びにも関与しだした。そして、14世紀ごろ成立した徴兵制度**デヴシルメ**（強制徴用）**制度**は、1638年に廃止された。
 - ・18世紀になると、イエニチェリは10万人にもおよび、一部は商売や貿易も手がける様になった。イエニチェリとしての役割や忠誠心はあいまいに。軍事技術は時代遅れになり戦闘能力も低下。
 - ・1798年、アポレオンのエジプト遠征。⇒イエニチェリの弱体化が認識された
 - ・スレイマン一世の最盛期は、オスマン帝国の力がピークに達した時期であるが、同時にオスマン帝国の交易経済が弱体化し始めた時期でもある
 - ・中央政府は徴税にあたり、農業関連の税を物納ではない形で直接集めるため、ティマール制から**タックス・ファーミング**への移行を余儀なくされた
- イエニチェリ軍団制度は、オスマン帝国中央政府における政治的停滞の主因
- タックス・ファーミングの変遷：「ティマール制」⇒「マリキヤーネ（1695年導入）」⇒「エシャム（1768年導入）」
- 1820年以降の崩壊の100年ではなくて、中央政府が均衡を失ったその前の100年が主因

第8章 日本の夜明け

《衰退の概要》

大国：日本

転換点：1994年

経済的不均衡：財政面、構造面

政治的な原因：特定利益集団や中央集権的な官僚制に比べて脆弱な民主制

行動面での機能不全：新重商主義を経済成長策とするヒューリスティック、大規模な銀行や企業による損失回避

《歴史現象と衰退要因》

— 省略 —

第9章 大英帝国の消滅

《衰退の概要》

大国：英国

転換点：1770～80年

経済的不均衡：領土面

政治的な原因：英国の階級的・地理的エリート層による損失回避

行動面での機能不全：英国市民権を与える範囲が狭すぎ、市民と被統治者を区別した

《歴史現象と衰退要因》

— 省略 —

第10章 ヨーロッパ 統一と多様性

《衰退の概要》

大国：欧州連合

転換点：2010年？

経済的不均衡：財政面

政治的な原因：抑制なしの財政赤字と安易な借り入れ、準主権国家のモラル・ハザード

行動面での機能不全：選挙で選ばれた当局者の時間的視野の狭さ、損失回避、文化的優位性のヒューリスティック

《歴史現象と衰退要因》

— 省略 —

第11章 カリフォルニア・ドリーム

《衰退の概要》

大国：カリフォルニア州

転換点：1992年～現在

経済的不均衡：財政面

政治的な原因：ゲリマンダーと任期制限による党派的分極化、極端に累進的な税率と強力な公共部門の労働組合

行動面での機能不全：議会議員らの時間的視野の狭さ、特定利益集団の集団行動の問題

《歴史現象と衰退要因》

— 省略 —

第12章 米国に必要な長期的視野

《衰退の概要》

大国：米国

転換点：1975年

経済的不均衡：財政面

政治的な原因：党派的な分極化

行動面での機能不全：進取的な政策立案者を犠牲にする、政党による損失回避、特定利益集団の集団行動の問題

《歴史現象と衰退要因》

— 今後、読んで、作成予定 —